

国際学会報告

国際研究集会「中世唯名論の起源と意味」に参加して¹⁾

岩 熊 幸 男

1991年10月3～5日に Wisconsin 大学 Madison 校で「中世唯名論の起源と意味」研究集会が開かれた。資金の都合上で第16回 Burdick-Vary Symposium となっているけれども、実質的には同大教授 W. Courtenay 主宰の単発学会といえる。日本からは清水哲郎と筆者が参加・発表した。朝から夕方までびっしり組まれた発表に加えて、大学主催のレセプション、Courtenay 家での歓迎のパーティー、音楽会等が連日にわたって生まれ、さらにはわずかに残った食事・休憩時間にも、参加者全員が同じホテルに滞在したこともあって朝夕三々五々集っては交わされる議論や情報交換で、文字通り息つく間もなく疲れた。が充実した三日間であった。

この研究集会には長い前史がある。

nominales という語は12世紀中葉にはじめて資料上に登場する。普遍論争上で唯名論の立場をとるものことだと、いわば自明なこととしてこれまで解されてきた。しかし、それとは全く異なる nominales 観がすでに第二次世界大戦前後二人の神学史研究者 M. D. Chenu と A. Landgraf によって示されていた²⁾。かれらの示したところでは、13世紀前半の一連の神学書に普遍論とは無縁の文脈で nominales が言及されているのである。(但しかれらの研究は中世論理学の研究者の間ではほとんど忘れられていた)。

12世紀論理学についての研究は戦後になって飛躍的に発展した。特に、12世紀後半に5つの論理学派が互に対抗していたことが明らかになってきた。nominales はその中の一学派である。それら諸学派の研究中に10年前たまたま筆者の発見した新資料で、nominales の主張として、「否定命題から肯定命題は導かれぬ *ex negativa non sequitur affirmativa*」というやはり普遍問題とは無縁の説が言及されていた³⁾。こうして、nominales とは何者かという問が新たにもちあがった。対抗諸学派はいず

れも12世紀中葉に活躍した代表的論理学者達の後継者であることは明らかだった。それでは *nominales* は誰の後継者か。

Ex negativa 説はその後すぐにアベラールにその起源のあることが気付かれた。さらに C. Normore が, *nominales* に帰されているその他の幾つかの説 (いずれも普遍問題には無縁な) を集め, そのどれもがアベラールに由来することを示唆した⁴⁾。それに対して W. Courtenay は, 当時ほとんど忘れられていた Chenu と Landgraf の見解を大幅に発展させて, *nominales* の起源をアベラールにのみ求めることに対する強力な批判を展開した⁵⁾。以上の諸研究がほぼ同時進行しており, どの論文も未出版であった1986年の段階で, Freiburg で開かれた第8回中世論理学・意味論ヨーロッパ・シンポジウムで, 筆者ははじめて Courtenay に会いそれらの問題を討議する機会をえた。当時の筆者は, 未刊ポルフェリオス注釈の検討を通していわゆる唯名論者はアベラールの存命中までは *vocales* と呼ばれていたことに気付いており⁶⁾, であってみれば *nominales* とはアベラールの死後かれを継いだ者達のことであろうと, 未だ漠然とではあるが考えていた。我々の討議には他の研究者達も興味を示した。そこで Courtenay は, *nominales* 問題についての conference を開くことを Freiburg シンポジウムの席上で提起した。それが実現したのが Madison 集会である。

S. Ebbesen と筆者は共同で, *nominales* とその対抗諸学派に言及した知られる限りの全資料のリストを作成⁷⁾して Madison に赴いた。テーマを絞った学会は盛会だった。発表者11名, 司会および Commentator 5名, 内訳は, 米5名・蘭英豪日から各2名・独デンマーク・ニュージーランドから各1名という国際集会となった。それに加えて, 聴講者として北米大陸在籍のこの分野の指導的研究者・中堅がほぼ全員集まり, かれらの学生達も含めて合計100名近くか。ある参加者は, こんな intensive な学会ははじめてだと言っていた。学会というものがただのお祭騒ぎになりがちなのはどこの国でも同じかと思うとおかしかった。

多くの発表は, 上記の論争に直接ふれることをせず, むしろ伝統的唯名論解釈を前提としたものであった。例えば, C. Mews は彼の発見になるロスケリヌスの神学書 (これまでロスケリヌスの著作としてはアベラール宛ての手紙が一通知られるのみであった) について論じ, J. Marenbon は未刊カテゴリー論諸注釈に基いて初期の唯名論 (筆者のいう “vocalism”) について論じ, C.H. Kneepkens は当時の文法学文献の中にみられる唯名論的要素について論じた。清水哲郎は, アベラールの普遍論の発展

についての新解釈を展開した。アベラール解釈に新規軸を出した M. Tweedale が commentator に立ったが、清水はそれに対して堂々の論陣をはった。

W. Courtenay の旧来の主張は次の点にある。ボナベントゥーラ命題論注解 (I, dist. 41, art. 2, q. 2) の証言によれば、'nominales' という呼称は彼らが unitas-nominis 説 ('albus' 'alba' 'album' sunt unum nomen) を奉じたことに由来する。従って、唯名論の本質は、普通考えられているように普遍論にあるのではなく、unitas-nominis 説にある。この意味で唯名論はアベラール以前（おそらくは古代末の文法家達）にまで遡りうる。アベラールはその長い唯名論的伝統の中の有力な一員といえるにすぎない。以上の Courtenay 説に対して、拙論では次の点を諸史料に基づいて明らかにした。unitas-nominis 説が明確に定式化されたのは12世紀中葉のことであり、しかも同説は nominales のみならず他の対抗する諸論理学派によっても主張されていた。従って、同説から 'nominales' という呼称が生じたということはない。この点でボナベントゥーラの証言は信を置けない。他の点でも、nominales に関する13世紀の言及は、12世紀の史料に照してみれば不正確なものが多い。さらに、'nominales' という呼称は、それ以前の 'vocales' にとってかわって、アベラルの死後1150年代になって彼の論理学上の後継者達に与えられたものであり、その論理学者集団は他の対抗諸学派と共に1180年代消滅した。他の諸学派の名はその後すぐに忘れられたのに対して、nominales（および Porretani=Gilbertus Porretanus の後継者達）の悪名のみは記憶に残り、13世紀を通じて次第に実像とは離れて伝説化されてゆく。以上の拙論は、しかし、弱点をひとつ残していた。13世紀の諸神学書に言及された 'nominales'—なかでも自らを nominalis と称したカプアのペトルス—の存在について説得的な説明を与えていないのである。

集会最終日午前、最後の発表として、まず M. Colish がペトルス・ロンバルドゥスとアベラールおよび nominales の神学上の関係について論じ、ついで W. Courtenay が nominalis と自称したカプアのペトルスの神学について論じた。筆者の知識の乏しい初期スコラ神学に関する二人の発表を聞いている内に、自分の中に残っていた上述の疑問が氷解するのを覚えた。

集会最終日午後は open forum である。全発表に基づいて nominales の identity と教説について何からの結論をうるべく自由討論が予定されていた。発表者全員が部屋の前部に聴講者にむきあって椅子が与えられた。英語の議論についていく自信のな

い筆者は、自由発言になるとまっさきに手をあげた。

nominales とは、拙論で示したごとく、本来は1150年代から80年代にかけて活躍したアベラルの論理学上の後継者達に与えられた名であった。しかし他方で、Garcia や Courtenay が示したように、アベラルの神学上の見解のいくつかは、ペトルス・ロンバルドゥスの命題論集に採用されていた。それらの見解は、論理学派としての nominales が消滅した12世紀末頃には、多くの神学者によって否定されるようになっていた。そしてそのアベラル起源であることが記憶されていたからであろうか、‘nominales 日く’という言い方でそれらの見解が言及されるようになった。とはいえ、起源がアベラルにあったにせよ、ペトルス・ロンバルドゥスの採用した見解である。それらを擁護しようとした神学者も存在した。カプアのペトルスがその代表である。彼らが nominales と自称するようになったのは当然のことであった。しかし、カプアのペトルスも12世紀の nominales の教説を正確に知っていたわけではない。その教説のごく一部を、神学上の伝統で伝えられてきた限りで、しかも不正確な形で継承していたにすぎない。

以上の発言の主旨がどこまで正確に通じたのか、いまだ論点も未整理で、しかもぶっつけ本番のまずい英語で述べたので、とても自信がない。しかし、W. Courtenay をはじめ何人かがあとで ‘I agree with you’ と言っていたので、多分だいたいの賛同をえたのではあるらしい。筆者の発言後も活発に議論が続いていたが、こちらは疲れ果てていてとてもついていくことができなかった。

Acts は Vivarium 誌第30巻 (1992年度号) に公表される予定である。

注

- 1) 本集会は、先に発表した拙論に未回答のまま残した問題を中心テーマとして開かれたものである (拙論『唯名論』の成立と展開) 中世思想研究32号 (1990), 135-142ページ, 第5節参照)。従って、通常の学会報告の枠をこえて、上記の問題にいかなる結着がついたかについて、やや詳しく報告することになった。その点、読者諸兄の御寛恕を請いたい。
- 2) M.-D. Chenu, Grammaire et théologie aux XII^e et XIII^e siècle, *Archives d'histoire doctrinaire et littéraire du moyen-âge* 10 (1935/36), pp. 5-28; A. Landgraf, Studien zur Theologie des zwölften Jahrhunderts, *Traditio* 1 (1943), pp. 183-222.

- 3) Cf. S. Ebbesen & Y. Iwakuma, Instantiae and 12th Century 'Schools', *Cahiers de l'institut du moyen-âge grec et latin* 44 (1983), pp. 81-85.
- 4) C. Normore, The Tradition of Mediaeval Nominalism, *Studies in Medieval Philosophy* (ed. J. F. Wippel), Washington D. C. 1987, pp. 201-217.
- 5) W. Courtenay, Nominales and Nominalism in the Twelfth Century, *Lectio-num varietates: Hommages à Paul Vignaux* (1904-1987), (ed. J. Jolivet et al.) Paris 1991, pp. 11-48.
- 6) 上記注1) の拙論参照。同論に大幅な増補をほどこしたものが下記として発表される。Iwakuma Y., *Vocales, or Early Nominalists*, *Traditio* (印刷中)。
- 7) Iwakuma Y. & S. Ebbesen, Logico-theological Schools from the Second Half of the 12th Century: A List of Sources. 本論は、本集会の Acts の一部として *Vivarium* 誌上に発表される。